

口永良部島の火山活動解説資料

福岡管区气象台
地域火山監視・警報センター
鹿児島地方气象台

＜噴火警戒レベルを3（入山規制）から2（火口周辺規制）に引下げ＞

口永良部島では、5月以降、火山性地震に減少傾向がみられ、規模の大きな火山性地震も観測されていません。また、GNSS連続観測では島内の基線で2月頃から縮みの傾向がみられています。その他の観測データに特段の変化は認められません。

以上のことから、口永良部島では新岳火口から西側で2kmを超え、その他の範囲では新岳火口から1kmを超えて影響を及ぼす噴火が発生する可能性は低くなったと判断し、本日（5日）11時00分に噴火警戒レベルを3（入山規制）から2（火口周辺規制）に引き下げました。

火山活動は低下していますが、新岳火口及び古岳付近での火山性地震の発生が続いており、火山ガス（二酸化硫黄）の放出も少ないながら続いています。また、新岳火口西側割れ目付近では、地熱域が引き続き観測されています。引き続き、火口周辺に影響を及ぼす程度の噴火が発生するおそれがあります。

【防災上の警戒事項等】

新岳火口から概ね1kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。また、新岳火口から西側の概ね2kmの範囲では、火砕流に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

○ 活動概況

口永良部島では、2021年2月下旬から主に新岳火口付近の浅い場所を震源とする火山性地震が多い状態で経過していましたが、5月以降、減少傾向がみられ、規模の大きな火山性地震も観測されていません。また、新たなマグマの上昇を示すと考えられる新岳西側山麓付近の火山性地震は、2020年6月以降観測されていません。

6月22日及び23日に実施した現地調査では、新岳火口西側割れ目付近の地熱域の状況には、火山活動の活発化を示す特段の変化は認められていません。

火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、1月以降、少ない状態で経過しています。東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、1日あたりの放出量は、5月は30～70トン、6月は20～60トン、7月は70トンと1日あたり数十トンで推移しています。

この火山活動解説資料は福岡管区气象台ホームページ (<https://www.data.jma.go.jp/fukuoka/index.html>) や気象庁ホームページ (https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php) でも閲覧することができます。

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び屋久島町のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』を使用しています。

GNSS 連続観測では、島内の基線でみられていた 2019 年 10 月頃からの島内の伸びは、2021 年 2 月頃から縮みに転じています。

以上のことから、口永良部島では新岳火口から西側で 2 km を超え、その他の範囲では新岳火口から 1 km を超えて影響を及ぼす噴火が発生する可能性は低くなったと考えられます。

一方、新岳火口及び古岳付近での火山性地震は 1 日数回程度発生しており、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量も 1 日あたり数十トンと少ないながらも続いています。また、新岳火口西側割れ目付近では、地熱域が引き続き観測されています。引き続き、火口周辺に影響を及ぼす程度の噴火が発生するおそれがあります。



図1 口永良部島 警戒が必要な範囲

新岳火口から概ね 1 km の範囲及び新岳火口から西側の概ね 2 km の範囲（橙線）

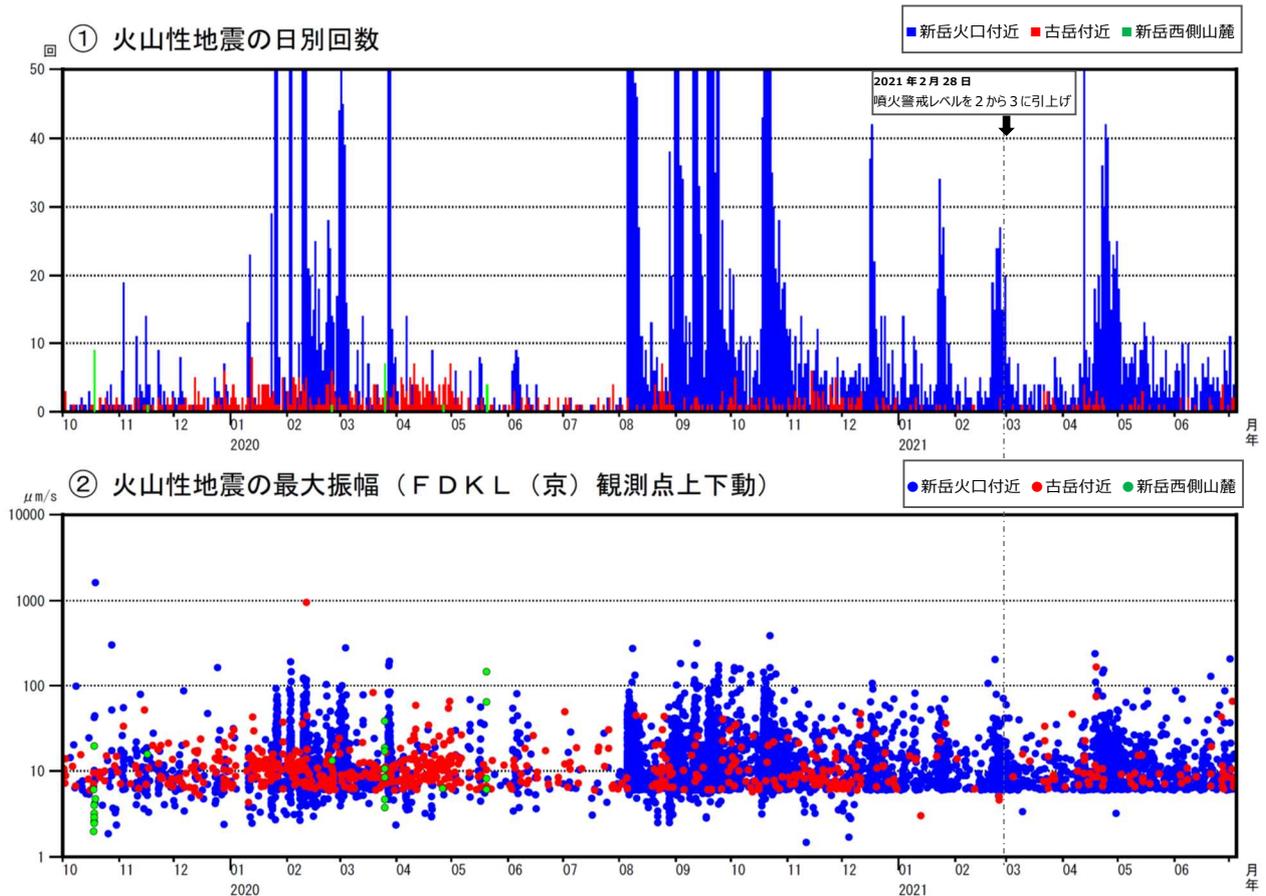


図2 口永良部島 火山性地震の日別地震回数と振幅 (FDKL (京) 観測点上下動)
(2019年10月～2021年7月4日)

- ・2021年2月下旬から主に新岳火口付近の浅い場所を震源とする火山性地震が多い状態で経過していましたが、5月以降、減少傾向がみられ、規模の大きな火山性地震も観測されていません。
- ・新岳火口及び古岳付近での火山性地震は1日数回程度発生しています。
- ・新たなマグマの上昇を示すと考えられる新岳西側山麓付近の火山性地震は、2020年6月以降観測されていません。

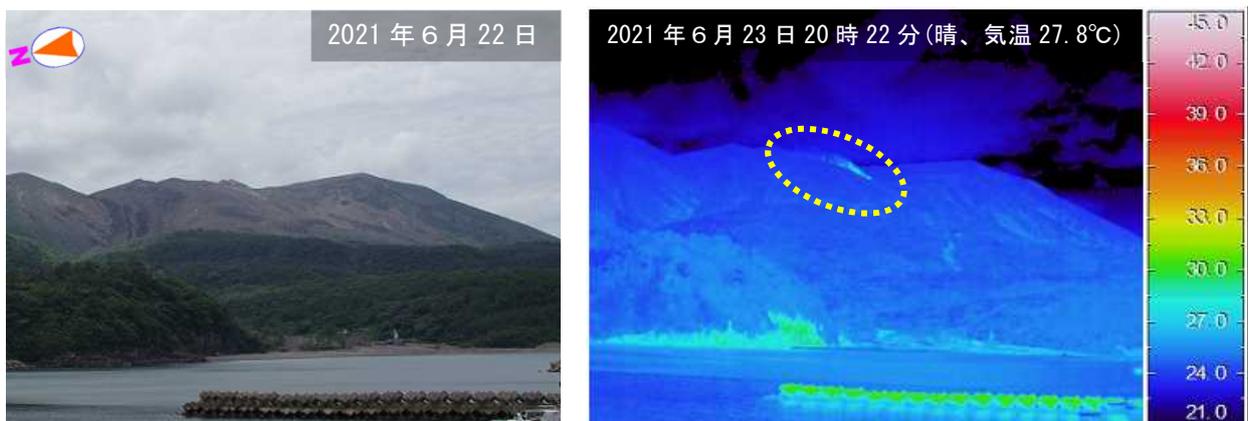
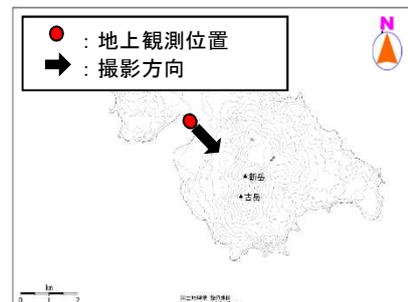


図3 口永良部島 新岳火口及び新岳火口西側割れ目付近の状況 (本村から観測)

6月22日及び23日に実施した現地調査では、赤外熱映像装置による観測において、引き続き、新岳火口西側割れ目付近の地熱域 (黄破線内) を確認しました。地熱域の温度と分布には特段の変化は認められません。



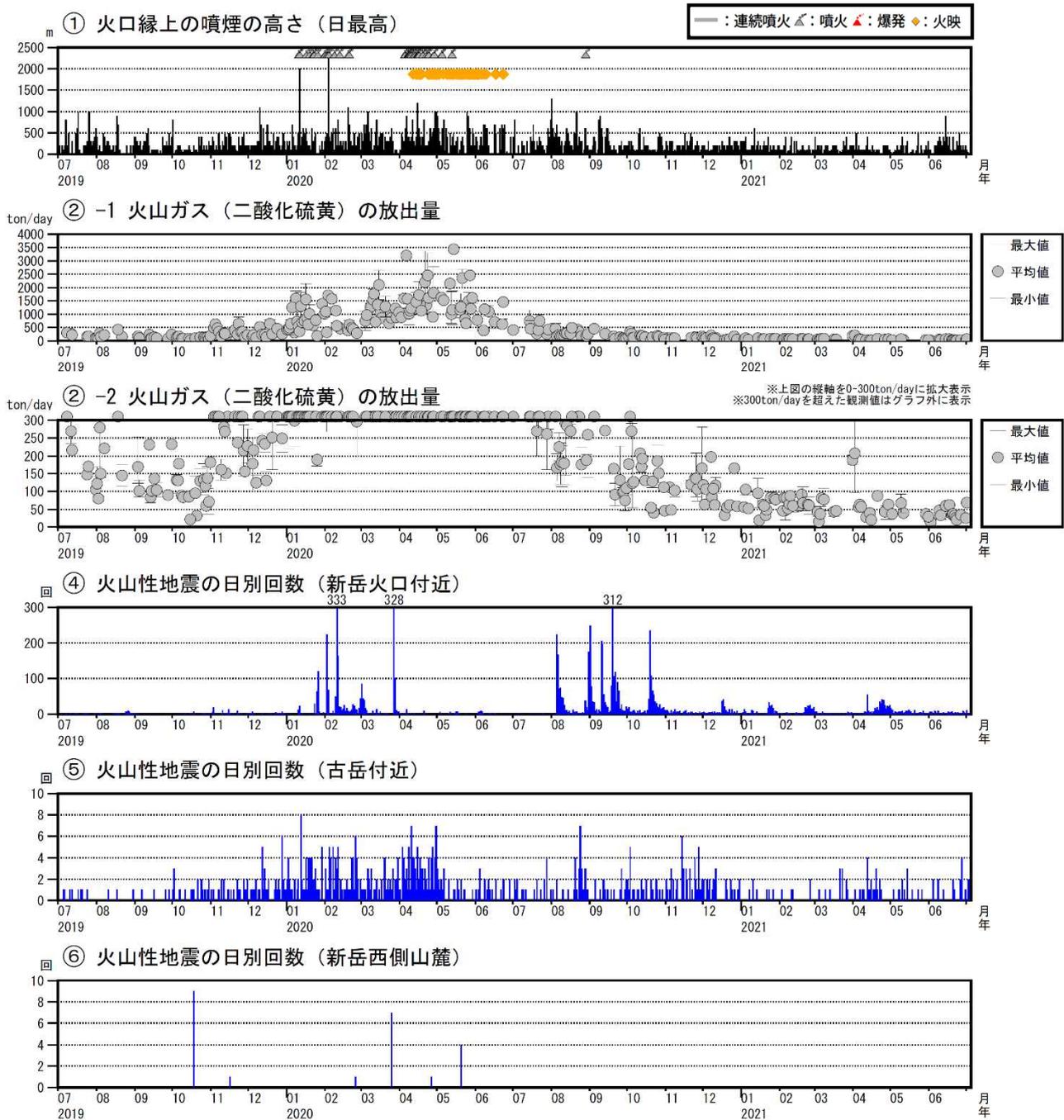


図4 口永良部島 最近の火山活動経過図 (2019年7月～2021年7月4日)

- ・噴火は2020年8月30日以降観測されていません。
- ・火映は2020年6月25日以降観測されていません。
- ・東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、火山ガス(二酸化硫黄)の1日あたりの放出量は、5月は30～70トン、6月は20～60トン、7月は70トンと1日あたり数十トンの少ない状態で推移しています。
- ・2021年2月下旬から主に新岳火口付近の浅い場所を震源とする火山性地震が多い状態で経過していましたが、5月以降、減少傾向がみられます。引き続き新岳火口及び古岳付近での火山性地震は1日数回程度発生しています。
- ・新岳西側山麓付近の火山性地震は2020年6月以降、観測されていません。

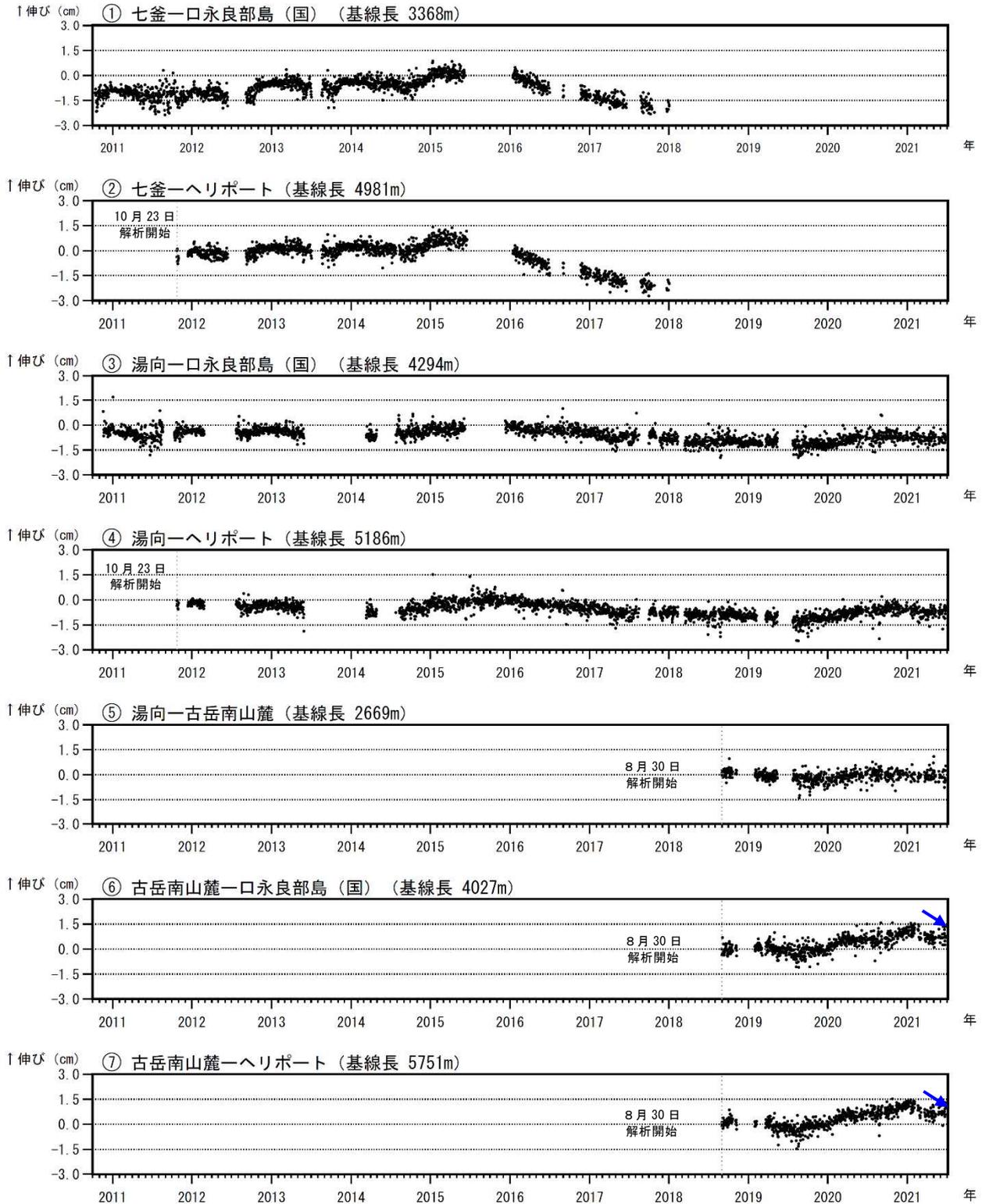


図5 口永良部島 GNSS 連続観測による基線長変化 (2010年10月～2021年7月4日)

GNSS 連続観測では、2019年10月頃からの島内の基線の伸びは、2021年2月頃から縮みに転じています。

これらの基線は図6の①～⑦に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

2016年1月以降のデータについては、解析方法を変更しています。

(国)：国土地理院

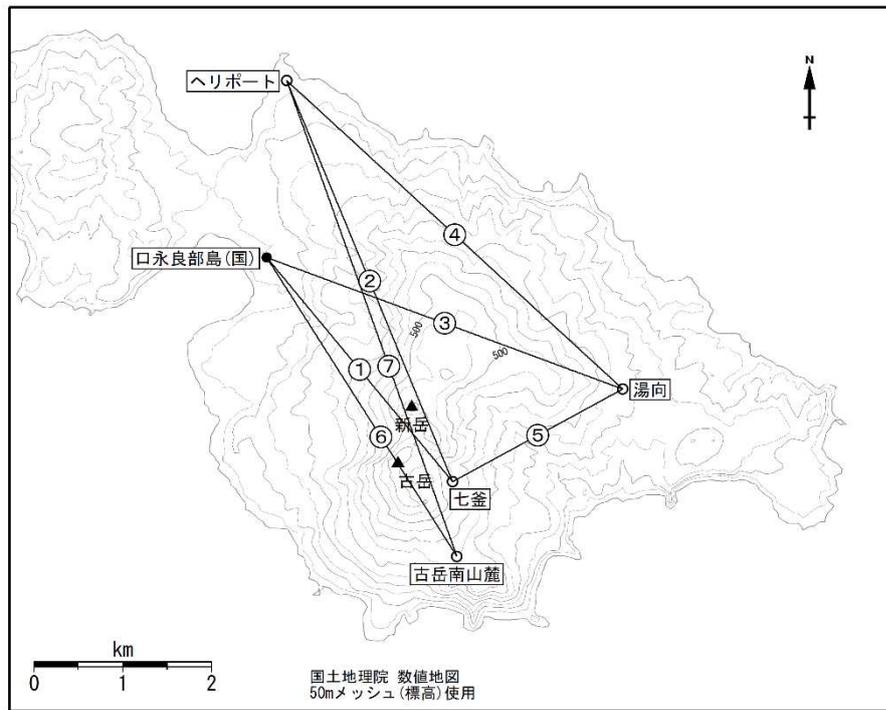


図6 口永良部島 GNSS 連続観測点と基線番号

小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
(国)：国土地理院

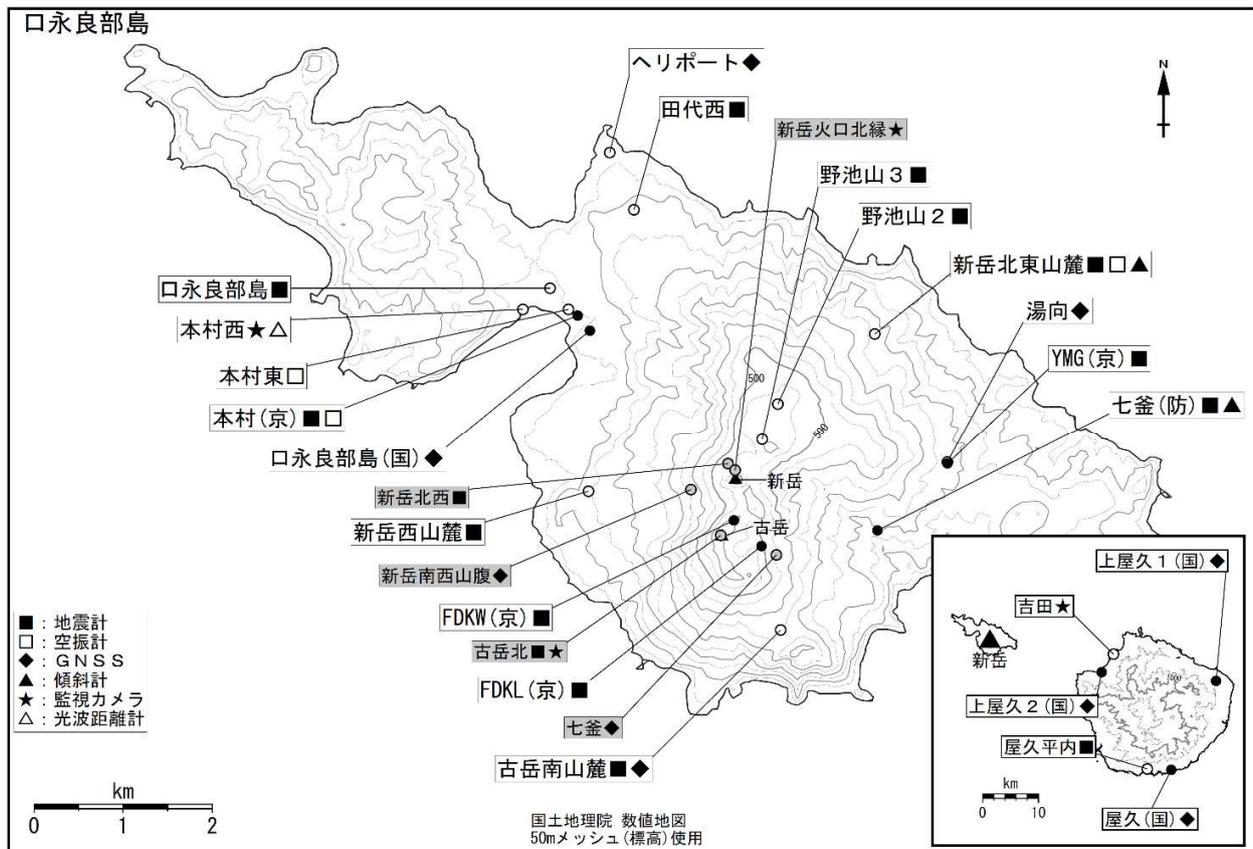


図7 口永良部島 観測点配置図

小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
(国)：国土地理院、(京)：京都大学、(防)：防災科学技術研究所

図中の灰色の観測点名は、噴火等により長期障害となっている観測点を示しています。